志　賀　重　昂

—人と思想—

定平元四良

志賀重昂—人と思想

日本の精神史，思想史を研究する場合，種々な側面から研究できる。ナショナリズムの展開をみるのも一つの作業である。ナショナリズムをとりあげる場合，その概念の曖昧さが問題にされるし，民族主義，国民主義，国家主義，など邦訳されるが，漢字を使用せずに片仮名でナショナリズムと書くのは，過去の暗いイメジを避けようとしているからであるといわれている。私は暗いイメジから逃れるだけでなく，一つの漢字の邦訳にはもりきれない意味内容を含むがゆえに，片仮名で「ナショナリズム」と書きしるすのだと考えている。「ナショナリズム」の概念の曖昧さは，「民族」の概念の曖昧さに由来するとされる。「ナショナリズム」は「民族意識」をぬきにして語ることはできないし，それは，民族形成の客観的要素を無視して語ることはできないであろう。その要素は，血縁の共同地縁の共同，文化（言語・宗教等）の共同，政治，経済の共同，さらに歴史的運命の共同などが考えられる。それぞれの要素は，単一で決定的要素となることはできない。これらの要素が複雑にからみあって，一つの民族が形成され民族意識が形成されるのである。ここで，地縁の共同一という要素について考えるとき，これが不可欠の要素でない例として，ユダヤ民族の場合がよく指摘される。ユダヤ民族は世界各地に散在しながら強固な民族意識を持続してきたことは事実である。しかし，そのことは民族形成要素としての地縁の重要性が否定されているわけではない。民族は地理的環境的概念であるといっても誤りではない。また，ナショナリズムの概念規定がなされるときに，パトリオティズムとの相違がきまって語られるが，郷土に対する愛の情念であるパトリオテイズムはナショナリズムとは無縁の情念ではあるまい。むしろ，重要な精神的基礎を構成するものであろう。しかしてこの情念は，いまある自己を育成してきた地理的自然的環境—郷土に対する感謝と誇りの情感である。この小論は，日本の自然に対する情念を喚起し鼓吹した一人の人物，志賀重昂をとりあげようと思う。

志賀重昂のライフヒストリーを，「札幌在学日記」と「年譜」とによって簡単にスチッチすれば，以下のようになる。

文久3年	愛知県岡崎に生る。
明治7年	東京・芝の攻玉塾に入る。英学を始む。
明治11年5月	芝塾を去る。
明治11年9月	大学予備門に入学。
明治13年	札幌農学校に入学。
明治15年10月	欧州行を志し独逸語を始む。
明治16年1月	仏朗西語を始む。
明治16年7月	欧州行を決行しようとして東京へ出発。
明治16年8月	札幌へ帰る。
明治17年	札幌農学校を卒業。
明治19年	南洋諸島を歴訪する。
明治22年	『南洋時事』を著す。
明治21年	三宅雪嶺らと雑誌「日本人」を起し「政教社」に籠る。
明治27年	『日本風景論』を出版。
明治29年	進歩党の名誉幹事に推される。
明治30年7月	農商務省山林局長に任ぜられる。
明治30年10月	内閣首班の政策を批判し免職となる。
明治35年	衆議院議員に当選。
明治37年	日露戦争の起るに及び約6ケ月間観戦する。
明治43年	世界漫遊の途に上る。
大正3年	南米各地を視察。
大正11年	世界漫遊の途に就く。
昭和2年	病をえて忽焉として卒す。

享年65才[1]

志賀重昂の思想の形成を考えるとき，攻玉塾と札幌農学校時代の彼を充分に知る必要があるが，遺憾ながら，それらのことを充分に明らかにし得ない。「札幌在学日記」をみるかぎり，彼は学業に熱心な模範学生ではなかったようである。また，「私の学生時代」のなかで，「学校の報告書を見ても直ぐ解る，私は極めて不成績のものであって，卒業の時には，生理学の教師カッター氏と，農学の教師ブルクス氏とが，有体に云へば私を気の毒に思い，僅に正規の点に満たせ，そして卒業させて呉れた位の事である……今日私が幾分か世間に知られて居る文学，学問などの方面から云へば，札幌での学問は左程関係して居らぬ[2]」といっている。とはいえ札幌における学生生活が，彼の思想形成に全くかかわりがないとはいえないであろう。札幌農学校入学までに心の内奥に育ててきたものを，学校に横溢すムードのなかで一層充実させたことは否定し得ないであろう。「私の学生時代」のなかで，自身の不学問不成績を語った後で，第1期生からの同窓の人々について語っている言葉のなかに，そこに学んできた同窓達のスピリットに，約言すれば「漢学流の旧思想が新光明に照らされて輝いたのである[3]」という札幌農学校のムードを誇らかに回想している，また，さきに書いた年譜にみられる以上に海外を視察旅行をしている。そして，国民に海外への認識を拡めさせる意図のもとに，その見聞録を書いた。この彼の行動力の豊かなことは，「札幌在学日記」にもみられるし，在学中に海外渡航を意図したことも年譜に明かである。彼のこの意欲はいつ，どこで培かわれたのであろうか。攻玉塾の時代であったかどうか，明かにし得ない。

さて，彼の思想の形成とともにその位相を示すものは「政教社」の存在である。鹿鳴館の仮装舞踏会に表象される政府の欧化政策を批判するものとして，徳富蘇峰の「民友社」と，三宅雪嶺，志賀重昂らの「政教社」があった。前者は，鹿鳴館的欧化主義のもっている貴族性を批判し平民的急進主義をとった。後者は，同じく鹿鳴館的欧化主義を批判しながら，国粋保存主義および国民論（ナショナリズム）の立場をとった。志賀重昂の思想を理解するために，「政教社」を焦点におきながら当時の思潮に言及しておこう。明治20年代は，10年代後半の自由民権運の崩壊と，それにひきかえ，帝国憲法の発布（22年）および教育勅語の渙発（23年）による天皇制絶対主義国家の確立の過程であり，反動の時代であるといわれる。それは，ナショナリズム抬頭の時期ともいわれている。自由と民権の確立を基準とするならば，たしかに反動であり後退ではあるが，それは当然きたるべき反省の時期でもあったといえる。明治20年代は，鹿鳴館の舞踏会とともに開幕した。それは，治外法権，協定関税率，最恵国待遇条項などをもつ安政条約を改正せんとする民族的自覚の仮装舞踏会であった。この民族的自覚の在り方への批判として，民友社と政教社とが誕生した。そして政教社の機関誌として「日本人」を発刊し，この誌上で特に活発な言論活動を行ったのが志賀重昂と三宅雪嶺であった。「日本人」誌上での志賀の主張は後述するとして，彼の処女作「南洋時事」からみていかなくてはならない。

札幌農学校在学中から意図していた海外旅行が実現する日が来た。明治19年2月，志賀重昂は海軍兵学校練習艦「筑波」に便乗を許され，約10ケ月間，南洋諸島を巡航し，同年11月帰朝した。その旅行記が『南洋時事』である。約2週間で書き上げ20年3月に出版した。何故それ程いそいで出版せねばならなかったのであろうか。そもそも南洋諸島旅行の意図はどこにあったのだろうか。年譜をみると「列国日本を蔑視し南海蒼溟の彼方物情徒らに騒然南洋諸島は列国の食餌と化す，之を看て憂国不惜忽ち意を決して南の方カロリン，濠太利，新西蘭，フイジー，サモアに渡り，更に長駆哇布を巡歴して同年11月帰朝す」と書かれている。またその前年には「亜弗業斯担問題のため英露二国当に交戦せんとし英国，朝鮮海峡の巨文島を占領す当時血気の一青年奪然書を抛って対州に帆航し密かに情況を視察す」とある。この二文をみるだけで彼の意図を察知することができる。また，「初版自序」と「緒言」をみると，『南洋諸島旅行記』とせずして『南洋時事』とした所以も述べられている。それは，一言でいうならば「危機意識」である。志賀は南洋諸島で，先進諸国

（独逸，仏蘭西，英吉利等）の侵略をまのあたりにみたのである。ある小島の土人の運命を述しながらつぎの如くいう。白皙人種は優等人民で黄，黒，銅色，馬来の諸人種は劣等人民である。最劣等人種は白皙人種と交渉するとその人口は急速に減少していく，甚しきは絶滅したものもある。されば，今日，黄，黒，銅色，馬来の諸人種は自重自奪しなければ白皙人種にほろぼされるであろう。その原因を，ダーウキンの所説をも引用しながら説明している。劣等人民は優等人民と交通せし以来，肉体的にも精神的にも幾多の錯乱を生じ，竟に短折夭死するにいたる。されば，「予輩日本人ハコレト競争シ，コレヲ防禦シ，以テ国旗ノ惟命ヲ永遠ニ保維スルノ策ヲ講ゼルベカラズ。其策タルヤ他ナシ。蓋シ黄色人種ヲ以テ成立スル強国ノ相賛翼聯盟シテ漸ク欧米列国ト軒輊スルニアリ，亜細亜大陸ニ国アリ，支那ト云フ。……支那人民ニシテ多年潜伏シタル勢力ヲ漸次発揮シタランニハ，其形勢コレヲ白皙人種ノ諸邦国ト軒輊スルモ敢テ一歩モ譲ラザル可シ，且近時此国外交上ノ制治ヲ観望シ，兼テ将来東洋ノ貿易上ニ彼此ノ関繋ヲ予想スレバ，最予輩ガ注意ヲ忽カセニス可カラザルモノアリ。我日本コレト協同連盟シ兼テ英国ト気脈ヲ通ジ以テ立国ノ基礎ヲ鞏固シ漸ク前ミテ欧米列国ニ対セバ，国旗ノ惟命ヲ永遠ニ保維スル蓋シ難キニ非ラザル可シ。瑣々タル小怨恨ノ為メニ唇歯善隣ノ交誼ヲ失シ，釁隙ヲ開クガ如キモノアレバ，是レ識者ノ大ニ取ラザル処ナリ[4]」といっている。有色人種として連帯，就中，支那と協同し白皙人種へ対抗するという人種論的ナショナリズムを主張している。が英国と気脈を通ずるということは，当時における英国の世界的な力を認識していたことによるものであろう。また，支那との協同連盟を説くところは，彼が福沢的「脱亜入欧論」を主張するものではないことが理解できる。さらに，興業殖産の一途は，やがでわが国が海外に市場を求めなければならないことを考え，最も認識不充分な南方諸島の知識を国民に伝えようとした。濠洲の実情を伝えながら，濠洲との貿易の心得を述べ，両国間の貿易の利点を10ケ条にわたって指摘している。さきに，『南洋時事』は危機意識の産物であるといった。では，危機意識を触発したものは何か。それは条約改正問題である。当時の政府の課題は，植民地的な安政条約をどうして対等条約に改正するかにあった。その中の一つ，租界廃止とひきかえに外人に内地雑居を許可するという案も論議の的になった。風習の異いが社会生活を乱すということもあろうが，一番恐れたのは，彼等に自由に商売を認めることによって，資本力の弱い日本人が漸次に駆逐されていくこと，つまり，殖産興業の実権を彼等の手中に握ぎられてしまうことであった。志賀重昂が，アングロサクソン民族のために滅亡しつつある南方諸島土民の状況を記述したのも，政府の「条約改正」案が実施された場合に，やがておこるであろう事態への警告であった。彼は『南洋時事』の緒言の最後に，自分の論述の当不当は今より50年後に断ずべきか，といい，巻末の自跋では，50年後の明治70に南洋諸島を巡遊し，再度，『南洋時事』を著はしたとき，それを読む者の多数は大和民族ではなくして，日本国内に散在する「チュートニック」「ラテン」「スラヴキニツク」諸民族であろうといっている。

しかし，彼が「外国の資本ヲ輸入ス可シ，外人ノ内地雑居ヲ奨誘シテ以テ国内ノ金融ヲ滑カニス可シ，トハ我国一部ノ人士ガ奨説スル処ナリ。其議論ノ是非ハ予輩ノ与リ知ラザル処ナリ雖モ，……今日我国ノ風潮ハ漸次興産殖産ノ一途ニ帰スル傾向アレバ数年ヲ出デズシテ国内ニ工業生産ノ興起スルハ期シテ待ツベキモノナリ。然レバ今日ヨリ予メ後図ヲシテ周ネク各国ヲ通覧シテ其俗ヲ察シ風ヲ観テ，箇々ノ嗜好ヲ査シ人々ノ需用ヲ考ヘ，以テ他日ノ為ニ広ク新販路ヲ世界ニ求ムルハ敢テ大早計ト云フ可ラズ[5]」といっているのをみれば，単に，消極的に外人の内地雑居に反対するだけではなく，より積極的に日本の資本主義の発展を期待し，その市場を確保するためにも，濠洲その他の南方諸島に日本人の眼を向けさせようという念願をもった『南洋時事』である。さて，『南洋時事』発刊の1年後，『日本人』が発行されることになった。

「日本人」誌上の若干の論述

この雑誌の若干の論述をみることによって，彼の思想の中核を理解できると考える。「日本人が懐抱する処の旨義を告白す」（「日本人」第2号所

載）からその要旨を述べていくことにする。日本の自然的風土が自づから美術的観念を豊かにし，優婉高尚な観念を養成し，一種特殊なる国粋（ナショナリティ）を醸成発達せしめた。「蓋し這般の所謂国粋なるものは，日本国土に存在する万般なる囲外物の感化と，化学的反応とに適応順従し，以て胚胎し生産し，成長し発達したるものにして，且つや大和民族の間に千古万古より遺伝し来り化醇し来り。終に当代に致るまで保在しけるものにあれば，是れが発育成長を愈よ促致奨励し，以て大和民族が現在未来の間に進化改良する物の標準となし基本となすの，正しく是れ生物学の大源規に順適するものなり[6]」この国粋を精神として，進退去就の標とする。生物が機に臨んで変応するごとく，大和民族も変応する。変応の標準は「国粋保存」である。志賀はこのようにナショナリティを生物学的に捉えている。生物ナショナリズムといわれる所以である。そして，当時の最重最急の問題として，一つは，日本在来の旧分子を悉皆打破し，泰西の新分子を以て之と交換するか，もう一つは，大和民族が現在未来の嚮背を裁断するは，日本の国粋を保存し，之を進退変応の標準とするかである。前者を「日本分子打破」説という，後者を「国粋保存」説という。前者は飛起跳踵に過ぎ，その間に空隙を生じ，撩倒する畏れがある。そもそも，西洋の開化を悉く根抜して日本国土に移植しても，果して開化するであろうか，植物の異なれる土地への不適応の類推から文化の不適応を論じている。ついで，「日本分子打破」論者よりもさらに始末の悪いのは，「塗抹旨義」者である。「塗抹旨義」とは，日本の外面を虚飾塗抹せんとするもので，「彼の白皙人種の一顧を購はんとし，故更に不急なる土木を興し，不生産なる事業を創起し，虚飾是れ本領とする壮宏華麗なる建築物を新造し，無用の道路を修繕し，踏舞を勉強し，仮装舞会を奨励する[7]」ようなことをいうのである。このようなもののために，千万の蒼生が汗血を圧搾されることは慷慨悲愴を禁ずることが出来ない。かくのごとくみてくると，「日本分子打破旨義」と「塗抹旨義」とを排し，「国粋旨義」を鋭意奨説しなければならない。「国粋旨義」を主張するといっても，所謂国学者流に，神国，神州，天孫等を口にするものではない。ただ，泰西の開化を輸入しても，日本国粋という胃官を通して，之を咀嚼し消化し，日本なる身体に同化せしめんとするだけである。

かくして，日本前途の国是は『国粋保存旨義』に撰定せざるべからず」（「日本人」第3）ということになるのである。所謂国粋なるものが，自然的環境に適応して，隠約の間に胚胎発育したものであるから，天地自然の至利至益なる処を利用して成長したものであろう。人々個々の最特の長処で分業が起ったものであるとすると，国家間でも分業せざるを得ない。分業が経済世界の真理であり交易の起源であるとすれば，「国粋保存」は即ち経済世界の真理となる。単に「貴族的急進開化」と「塗抹旨義」の反動として「国粋旨義」をいっているのではない。それは，経済利益の本源本流であるがゆえにいっているのである。日本民人の最大多数の最大幸福は「国粋保存旨義」から湧出するものである。したがって，日本前途の国旨をここに撰定することを希望する。さりながら，「塗抹旨義」と「日本分子打破旨義」は，80余州到る処に拡充伝播して，上下貴賤はあげて両主義に眩惑心酔しつつある，そこで，志賀は，奪然起ちて「国粋保存」の大義を絶叫するのである。「国粋保存」の大義を疾呼絶叫し，鋭意大日本国の危急を求はんとするものである。

さらに志賀は，「日本国裡の事大党」（「日本人」第4号）で，日本の近代化を急ぐあまり，大国強邦に依頼してその指揮を仰ぎ，去就進退を決めるのが経済的であると考えるのが「事大党」であるが，一見それは能率的にみえるが，深謀遠慮の人士のとらないところである。「事大党」は平和分子を抱含し，平和分子はやがて屈服分子と化成し，国を滅亡に導くものである。われわれはすべからく「独立党」でなければならない，という。これは，英口，仏国，独国それぞれ依存しようとすることへの批判であった。また，「日本国裡の理想的事大党」（「日本人」第5号）では，急激な社会論者を批判している。彼等は，国家を愛慕する観念は転た微量で，世界を愛慕する観念は偏へに多額である。丈類が平和と平等に向って進歩し改革していくことは疑いないとしても，目下当今に際して，国家何する者ぞ，国名何する者ぞ，民族何する者ぞ，国粋何する者ぞ，唯世界あるの

み，唯人民あるのみ，国名を以て名誉とし国粋を保存するというのは野蛮な観念である。というのは大早計である。円満平和，平等なる世界になることを熱望するけれど，現在は，民族国家を以て自立せざるべからざる状態である以上は，鋭意民族国家が独立自立するのに力を尽さねばならない。つまり，政略上の事大旨義とともに理想的事大旨義＝社会論者をも排撃駆除しなければならない所以である。

「日本民族独立の方針」（「日本人」第23号）では，重昂は自分の思想を次のように要約している。

無形　日本民族の思想を独立せしむる事（国粋旨義）
　　日本民族箇々の勢力を惣併する事（大同団結）
有形　日本民族箇々の実力を増殖する事（殖産興業）

「国粋旨義」は，民族の精神を不羈独立ならしめ，自重自尊ならしめ，国勢を振起し国力を増進せしめるものである。世界史に照らしてみても国粋を振起しない国は，やがて衰退し滅亡している。日本民族の精神を独立しようとすれば，「国粋旨義」によるとともに，国民合一の大同団結に因らなければならない。国基を鞏固ならしむる最大手段である。以上は無形上の方針であるが，これを結実させるためには，日本の生産力を増進し国民箇々の財本を加殖することである。つまり，殖産興業である。無形上の方針と有形上の方針とが合して真成の文明を創造することができるのである。

『日本風景論』

志賀重昂の『南洋時事』，『日本風景論』，『地理学講義』等は，学問的には科学的ではないけれど，地理学の民衆化，国民化に偉大な功績があったといわれている。あまり科学的でない『日本風景論』が洛陽の紙価を高め，明治の出版界に画期的記録を印した史的文献であると評価されているのは何故だろうか。吉野作造のつぎの言葉が志賀重昂の論述の特徴をよく示している。「第一は学問の講明に清新の気分を味はされたことである。学校で学ぶものは，数学にしろ理化学にしろ，皆教科書の暗誦と机上の空論とに過ぎなかった。先生の著作に依てはじめて私共は，学問と人生との密接なる交渉を教はったのである。今から考へれば何でもない事のようだが，当時に在ては斯んな処に私共は未だ曽て経験したことのない新しみを覚えたものである。単に新しいばかりでない。活き活きした清新潑溂の気分を以て学問に臨み，又斯うした味ひを学問に見出し得ると信ずる様になったのは，何と謂っても先生の賜である。この点に於て先生の地理学に関する諸著は，それ自身の真価以外に，猶後世から記憶せざるべき或ものを有つと考へる。

第二に先生の地理学講明は特に私共の青年時代の国民的理想に多大の示唆を与ふるものであった。思うに日清戦争前後は，国内の整頓漸く其緒につき之からは大に海外に対って平和的発展を試みようと言う時代であった。退嬰局蹐是れ事とすべき時ではない。海外発展ということは何のわけなしに私共青年の心血を湧かしたものである。之も今日の青年にはわかるまいが，日露戦争後大正の御代に入るまで続いたと観ていい。而して斯うした時代に，空漠疎雑な煽動論でなく真に内容のある海外知識を供給して呉れた人々の随一は，実にわが志賀先生であったのだ。この点に於ても彼れは，明治後半期の青年に取て，たしかに一方の師表としてその尊敬する所の中心であった。」

さて，志賀重昂の『日本風景論』は，「江山洵美是吾郷」（大槻磐溪）と，身世誰か吾郷の洵美を謂はざる者ある」という美文調で筆をおこし，青ケ島の居民は多災なる古郷に帰り，占守島土人は新楽土を喜ばずして窮北不毛の故島に去り，エスキモ土人は文明の地シカゴよりも氷山雪塊の本国に逃れ去らんとした。「脆きは人の情なり，誰か吾郷の洵美を謂はざらん，是れ一種の観念なり。然れども日本人が日本江山の洵美を謂うは，何ぞ啻に其の吾郷に在るを以てならんや，実に絶対上，日本江山の洵美なるもの在るを以てのみ，外邦の客，皆な日本を以て宛然現世界に於ける極楽土となし，低徊措く能はず，自ら

花より明くる三芳野の春の曙みわたせはもろこし人も高麗人も大和心になりぬへし

頼　山陽

の所あらしむ。想うに浩々たる造化，其の大工の

極を日本国に鍾む，是れ日本風景の渾円球上に絶特なる所因，試みに日本風景の瀟洒，美，跌宕なる所を謂ふべきか[9]」と称揚している。すなわち，瀟洒，美，跌宕が日本の風景の世界に冠絶しているところであるといっている。ここで，彼があげているこれら三者の例のいくつかをあげてみる。瀟洒の例 (1) 脩竹三竿，詩人の家，梅花百株，高士の宅，是れ欧米諸国に在りて絶えて看る能はざる風景。(2) 一声の杜宇知る処ぞ，澱江の渡頭新緑流れんとす。美の例 (1) 嵐峡の桜雲，微月を掠め，夜色朦朧。(2) 駒ケ嶽（信濃）の峯頭，翠然たる偃松は，雪の如き花崗岩の上に匍匐し，翠は白に抹し，白は翠を粉す。跌宕の例 (1) 那須の曠野，一望微茫，松樹或は三或は五蒼健高聳す。(2) 立山（越中）の絶頂，百余の山嶽を下瞰し，一斉に雙眸中に収むる処。そして，瀟洒の粋を日本の秋に，美の精を日本の春に求めている。このような洵美の生じた理由として，

1．日本には気候，海流の多変多様なる事。
2．日本には水蒸気の多量なる事。
3．日本には火山岩の多々なる事。
4．日本には流れの浸蝕激烈なる事。

の四点を示し，日本海岸と太平洋岸の差異を表記した後で，それぞれについて詳細に説明している。

志賀は，従来から代表とうたわれてきた桜花をもって日本人の性情を代表せしめていることを不満とし，風雨，氷雪にめげず，他の艶を競い媚を呈せる軟弱な植物が枯死しても，独り生存し，たまたま斧で斬伐されたら未練を遺すことなく昂然と斃れる松柏科の植物こそ日本人の性情の標準とすべきものであり，「桜花と松柏とを調合安排せしものを以て日本人将来の特性となさざるべからず[10]」といっている。厳寒を経て凋衰せず，孤高烈風を凌ぎ，懸崖に直立する松樹を賞揚するのは単に美意識からでているのではなく，先進諸国との抗争に立ち向わんとする強じんな意志の表現であることを感得することができる。『日本風景論』が読書界を風靡した理由はさきに述べたが，これが，日清戦争中に発刊されたことを考慮に入れると，彼の美意識がナショナル意識に強くアピールしたことが考えられる。

本論の最初に，パトリオティズムはナショナリズムの重要な精神的基礎を構成するといった。『日本風景論』の美意識は，従来の近江八景式や日本三景式の古典的風景美を一蹴したといわれるが伝統的な美意識が一掃されてしまったとはいえない。桜花と松柏とを調合安排せしものを以て日本人将来の特性となさざるべからず，という彼の美意識が，人々のパトリオティズムを刺戟することにより，ナショナリズムの昂揚に作用した。和辻哲郎は『風土』の中で「風土性もまた社会的存在の構造であり，そして歴史性と離すことのできないものである。歴史性と風土性との合一においていわば歴史は肉体を獲得する」[11]といっている。風土性とパトリオティズム，歴史性とナショナリズム，歴史と民族とをそれぞれ代置して考えられないであろうか。

（註）

1．志賀重昂全集第8巻年譜および「札幌在学日記」により作製
2．全集第8巻153頁
3．全集第8巻159頁
4．全集第3巻7頁
5．全集第3巻29頁
6．全集第1巻1頁
7．全集第1巻3頁
8．全集第8巻228，229頁
9．全集第4巻1，2頁
10．全集第4巻20頁
11）和辻啓郎全集第8巻16頁
朝日ジャーナル編　日本の思想家2
亀井俊介著　ナショナリズムの文学